

徳島ペンクラブ通信

発行

徳島ペンクラブ

徳島市東沖洲2丁目1-13

徳島県教育印刷(株)内

TEL 088-664-6776

174号

平成28. 6. 30

28年度 定期総会

秋の協賛イベントは「海野十三」

47人出席 副会長に丁山氏、理事に山口、小川氏

阿波観光ホテル

徳島ペンクラブは、平成28年度定期総会を5月21日午前10時半から阿波観光ホテルで開いた。47人が出席。竹内菊世会長のあいさつ（別項）に続いて、同会長を議長に議事を進め、27年度の事業報告、決算報告並びに監査報告があり、いずれも承認された。また、今年度は役員改選の年ではないが、鳥羽俊明氏の辞任に

伴い空席となっていた副会長に、丁山俊彦理事。さらに新理事に山口久雄、小川公三の両氏を起用する人事案が提出され、全会一致でこれを承認した。この後、28年度の事業計画、同収支予算案の提案があり、原案通り承認された。

新年度の事業計画では、来年がペンクラブ発足50年になることから、特別事業として記念誌の発刊を計画。29年9月刊行を目的に準備段階に入っ

門付芸の実演とお話し

辻本一英さん

なっている県民文化祭参加の協賛事業は、3年前の富士正晴、一昨

年の野上彰、昨年のモラエスに続き、今年には「日本のSF小説の父」と称される徳島市出身の作家・海野十三（うんの・じゅうざ）を取り上げる。同時に、次号のペンクラブ選集も特集で「海野十三

①阿波木偶箱まわし保存会の中内正子会長が、初代天狗久作の「えびす頭」を披露
②は、ツメ頭「お福」の解説をする辻本一英さん



の世界」(仮題)にスポットを当てることそれぞれ報告された。さらに、これまで春と秋の2回実施してきた文学旅行は、新年度から春は「文学散歩」に衣替え。第1回目は去る4月29日、眉山の

会長あいさつ

竹内菊世

本日は、平成28年度の打ったてとなる総会にご出席くださいます。ありがとうございます。

東日本が落ち着かないままに、また九州での災害が続き、日本列島はどうなっているのかと心配なことです。

幸いにして四国徳島は、昭和21年の南海大震災以降、怖ろしい目に合っておりませんが、それは、もしかしたら今夜かも明日かもしれない訳で、天のみぞ知ることです。ただ、今こうやって仲間が集い、好きな事柄について話し合い、相互に理解を深めあえることを喜びたいと思います。

来年は、このペンクラブが創設されて、ちょうど50年の節目に当たります。

五十年記念誌を
発刊する予定で
す。この50年と
いう節目に、う



と、計画を進めておりますので、ご協力くださいますようお願い致します。

まく居合わせたこ
との記念に、会員
の皆さまには、な
んらかの形で執筆
していただくよう

また、恒例となっております。今秋の県民文化祭協賛事業では、富士正晴、野上彰、モラエスに引き続き、今回は海野十三を顕彰しようと準備を始めています。できるだけ多くの方にご参加頂いて、会を盛り上げてくださることを期待しています。会員には、経験豊かで、その道を極められた立派な方が大勢いらっしやいます。

総会では、その中から、毎年お一人ずつお話をさせて頂くことにしています。今日は、昨年より大いに話題を振りまいておられる辻本一英さんにご登場願いました。

よろしくご堪能いただけたらと思います。

麓、南佐古山麓コースで実施したことなどが報告された。

総会では、冒頭、木村義次会員が緊急発言を求め、今回の総会の会員への案内が不十分で、総会軽視もはなはだしい。もっと心してやってほしい、旨の強い口調の苦言があった。また、別の会員からは、総会での議決に関して「欠席会員から委任状をなぜとらないのか」、「第16回とくしま随筆大賞は、受賞者がほとんどペンクラブ会員で占められている。おかしいのではないか」などの疑問も出され、いつになく緊迫感の漂う総会となった。

総会に続いては、理事会員・辻本一英氏（芝原生活文化研究所代表）による講演と門付芸「三番叟まわし」などの実演を楽しんだ。辻本氏は徳島県内の伝統芸能や生活文化の調査研究に長年取り組み、門付芸のほか大道芸の「箱廻し」、祝福芸「芝原えびす舞」などを復活させ、全国各地で人権・同和問題の講演を行っている。こうした活動が評価され、27年度の「水木十五堂賞」に選ばれ、表彰されたばかり。



懇親会では和やかに会話が弾む

この日は、三番叟まわし、箱廻しのお話や徳島における門付芸の盛衰の歴史など珍しく、しかも興味深い話をたっぷり。その後、阿波木偶箱まわし保存会（辻本氏は顧問）の中内正子会長、南公代副会長らも加わって、人形を使つての解説付き実演。三番叟まわしや箱廻しのほか、この春復活させたばかりの「福まわし」も披露された。初代天狗久の作ったえべっさんの頭の紹介、箱廻しの人形の手の使い方の実演もあり、興味の尽きない1時間20分余だった。

最後は、席を別室に移しての懇親

会。新入会員の紹介のほか、会長指名による意見発表や自己PR場面もあり、アルコール抜きの懇親会ながら大いに盛り上がった。フイナールは三輪和子会員のオカリナ演奏で締められた。

徳島ペンクラブ2016年度理事・役員

(アイウエオ順 太字は新任、敬称略)

顧問 山下博之▽参与 上野隆、岸積、木村喜美子▽会長 竹内菊世▽副会長 蔭山美紗子、鈴木綾子、田上倉平、丁山俊彦、西池冬扇▽理事 安曇統太、小川公三、上窪青樹、木村英昭、楠本邦利、杉田卓次、竹内絃子、辻本一英、福島誠浄、船越淑子、萬宮千鶴子、山口久雄▽会計 上窪則子▽監事 新開英毅、二橋満璃▽事務局 桂ゆたか、正木孝枝、山崎純世 (5月21日現在)

年誌 50周年記念 杉田編集長、病気で辞任 後任に田上、鈴木両副会長

6月4日県立文学書道館であった定例の理事役員会の冒頭、竹内会長から、杉田卓次理事が病気のため、50周年記念誌の編集長並びに理事の座を辞したい旨の連絡があったことが報告された。これを受けて善後策を協議した。その結果、後任の編集長に田上倉平、新たに設けた副編集長に鈴木綾子の両副会長が当たることが決まった。記念誌は、ペンクラブ選集と合併号とすることが既に決まっている。記念誌編集は杉田編集長のもとで進めてきた方針を踏襲。スタッフの編集委員も杉田氏以外全員留任。編集委員会室は従来どおり「丁字堂」に置かせていただく。徳島ペンクラブ発足50年となる平成29年秋、発刊を目指す。

田上新編集長は「杉田編集長を推薦した立場からお引き受けすることを決断した。編集委員だけでなく、全会員のお知恵、ご協力をいただき、50年にふさわしい記念号にしたい」と話している。

「海野十三の世界」

多彩な実績 多角的に顕彰

徳島ペンクラブ選集パート34 (12月下旬発行予定)の原稿を次の要領で募集します。奮ってご応募ください。

特集

「日本SFの父」と呼ばれる海野十三を顕彰します。今回もペンクラブ協賛、秋の県民文化祭参加事業「徳島が生んだSFの父 海野十三」に呼応、特集でも取り上げることにしました。

海野はSF作家としてだけでなく、科学者、探偵作家、少年小説家、漫画家、翻訳家、海軍報道班員：など実に多彩な顔を持っています。戦前から戦後にかけての51年の比較的短い生涯ながら、その多彩な活躍ぶりは人間業とは思えません。会員の中にも、若い頃彼の作品を夢中になって読んだ人もいらっしゃるのではないのでしょうか。

特集では、作品だけでなく、その人となりをも面的に顕彰したいと思います。

●原稿 2000字または4000字。写真、イラスト等入れる場合はその分、文章を短く。

一般原稿

一部変更しました。随筆は2ページ分、2000字。短歌、俳句等は2ページ分、15首(句)。詩、連句は2ページ分。

●掲載料 前号から一部変更になっていきます。一般作品は2ページ分7000円、追加1ページ2000円、ただし、1ページだけの追加は誌面編集の関係上ご遠慮ください。2ページ追



県立文学書道館刊行の記念誌から

「選集」34号の原稿募集

加で計4ページ、掲載料は11000円となります。特集も会員外の方に依頼の場合や特例を除き、一般作品に準じます。掲載料は、翌年1月末に郵便口座引き落とし、または郵便為替で徴収します。

特集で取り上げたい作品&テーマ

昭和3年、探偵小説「電気風呂の怪死事件」(雑誌・新青年)で文壇デビューした海野は、戦前から戦後にかけて多岐にわたって作品を世に出し続けている。ペンネームも海野十三のほか、ジャンルによって丘十郎(おかおか・じゅうろう)、蜷貝介(しじみ・かいすけ)栗戸利休(くりと・りきゅう)、京人生(きょう・じんせい)と使い分けるなど、多彩。どの作品を取り上げるかは会員皆さんに一任。

著作に限らず、交流の深かった江戸川乱歩、横溝正史らとのエピソード、ふるさと徳島とのかかわり、映画化された「東京要塞」、戦地の十三に送った英夫人の手紙：等、テーマは自由です。

海野十三の略年譜

明治30年 12月26日、徳島市徳島本町に生まれる。
明治37年 福島小学校に入学。3年の途中まで在籍した。
明治39年 父が神戸税関に転職したため、7月、神戸市に転居。
明治42年 母かず亡くなる。
明治43年 神戸一中に入学。父が再婚。
明治44年 一家は東京に転居。昌一はひとり神戸に残る。
大正4年 3月 神戸一中を卒業。上京して浅草今戸で家族と共に生活する。
大正5年 早稲田大学予科に入学。
大正8年 早稲田大学理工学部電気科に進む。
大正9年 「野球界」に京人生の名義で「野球狂の神経衰弱」を掲載。
大正12年 早大卒業。通信省電気試験所に勤務、無線の研究に従事。
この年、友人の妹・樋口たか子と結婚。9月の震災で浅

草今戸の自宅が全焼する。

大正13年 この頃から電気関係の雑誌への執筆が増える。早稲田電気工学会庶務幹事に就任。長女朝子生まれる。

大正14年 7月、電気試験所調査報告として工政会出版部から「米国製真空管一般特性表」(佐野昌一名義)を刊行。技術専門書の処女出版。

昭和1年 1月、「無線と実験」に科学童話「ラヂ夫と電子王の話」(栗戸利休名義)を発表。初めて活字化されたフィクション。
昭和2年 3月、「無線電話」にペンネーム海野十三を使った初の科学小説「遺言状放送」を発表。11月、「科学画報」主催の懸賞科学小説に「謎の短波無線局」を応募するが、翌年1月の発表によると選外佳作。

昭和3年 4月、「新青年」に「電気風呂の怪死事件」を発表し、探偵文壇にデビュー。4月3日、たか子夫人死去。5月、「壊れたバリコン」を「無線と実験」に発表。

昭和4年 6月、「白蛇の死」、10月、「赤耀館事件の真相」を、それぞれ「新青年」に発表。

昭和5年 4月、「電気看板の神経」を「新青年」に発表。8月、海野十三名義の初の単行本「麻雀の遊び方」を博文館から刊行。11月、「空中楼阁の話」を「新青年」に発表。

同月、電気試験所の神崎英と結婚。荏原郡世田谷町に新居を定める。

昭和6年 1月、「人造人間殺害事件」を「新青年」に発表。二女陽子生まれる。11月、「振動魔」を「新青年」に発表。

昭和7年 3月、「ラヂオ殺人事件」を「改造」に発表。5月、処女長編「葬送曲」を「朝日」に連載。10月、「爬虫館殺人事件」を「新青年」に発表。12月、初の小説集「電気風呂の怪死事件」を春陽堂から刊行。「爬虫館事件」を「新青年」に発表。丘十郎のペンネームを使い始める。
昭和8年 8月、「太平洋雷撃戦隊」で「少年倶楽部」に初登場。

- 長男晴彦生まれる。「赤外線男」を「新青年」に発表。
- 昭和9年 「俘囚」「人間灰」などを「新青年」に発表。
- 昭和10年 電気試験所を辞し、作家専業となる。9月、「三人の双生児」を「新青年」に発表。この年、二男暢彦生まれる。弁理士の資格を取得。7月、「深夜の市長」出版記念会。
- 昭和11年 11月、30年ぶりに故郷徳島を訪れる。
- 昭和12年 木々高太郎・小栗虫太郎との共同編集により探偵雑誌「シユビオ」を創刊。「モダン日本」に「十八時の音楽浴」を発表。三男昌彦生まれる。
- 昭和13年 3月、初の映画化作品「東京要塞」公開。「浮かぶ飛行島」と「大空魔艦」を連載。佐野電気特許事務所を開く。
- 昭和14年 9月、「火星兵団」を「東日小学生新聞」などに発表。
- 昭和16年 秋、海軍省から徴用礼状を受け取り、海軍報道班員に任命される。11月、文芸講演会で四国を訪れる。この年、「人造人間エフ氏」がラジオドラマ化。
- 昭和17年 1〜5月、海軍報道班員として南方ラバウルへ。7月4日、吉岡専造が海野十三宅を訪問。徳島の県教育会館で文芸講演会。
- 昭和18年 「栗水兵戦地」「不思議な飛行士」などを発表、「怪鳥艇」がラジオドラマ化。
- 昭和19年 1月、「潜水島」を「少女クラブ」に発表。「成層圏戦隊」がラジオドラマ化。「潜水島」「宇宙戦隊」を発表。12月から空襲都日記つけ始める。
- 昭和20年 「新空魔艦」を「飛行少年」に発表。5月、「潜水島」がラジオドラマ化。終戦となり、一家心中を決意し遺書を作成するが果たさず、丘名義で「地球発狂事件」を「協力新聞」に発表。
- 昭和21年 3月、丘名義で「四次元漂流」を「子供の科学」に発表。6月、咯血し、体力が低下する。この年、上田光雄主宰の日本科学哲学会・科学小説創作会の顧問となる。「密林荘事件」「骸骨館」など発表。
- 昭和22年 2月、公職追放の仮指定を受ける。6月、再び咯血。
- 昭和23年 4月、公職適否審査委員会により非該当と決定。仮指定を解除される。「怪星ガン」「透明猫」など発表。7月、この頃から横溝正史に毎日のように手紙を出す。亡くなる当日まで続いた。
- 昭和24年 5月14日、横溝正史宅を訪問。5月17日、結核のため世田谷区若林の自宅で死去。享年51歳。5月23日、告別式。
- 昭和25年 木々高太郎監修で、「海野十三全集」全8巻が東光出版社から刊行。
- 昭和30年 5月28日、海野十三慰霊祭。
- 昭和37年 阿波掃台会（山本武男代表）と四国文学界（佃實夫代表）が中心となって「海野十三の碑を建てる会」が結成される。会報「J-U通信」を発行し、徳島公園に海野十三碑を建立した。
- 平成2年 三一書房から「海野十三全集」13巻、別巻（2冊）の刊行が始まる。平成5年1月完結。
- 平成4年 7月25日、徳島市で「海野十三の会」結成。
- 平成5年 5月、徳島市中央公園内の海野十三碑を市内安宅町、四所明神前へ修復移転。7月、中央公園内に海野十三碑を新しく建立した。
- 平成10年 5月17日、海野十三の会編「J-U通信復刻版」刊行。
- 平成12年 5月17日、海野十三の会編「海野十三メモリアルブック」刊行。
- 平成14年 10月、徳島県立文学書道館が開館し、海野十三コーナーが設けられる。
- 平成15年 佐野英さん（海野十三夫人）亡くなる。
- 平成19年 3月、徳島県立文学書道館が海野十三短編集「三人の双生児」「十八時の音楽浴」（ことのは文庫）刊行。

※この年譜は、県立文学書道館が平成20年「生誕一〇〇年記念日本SFの父・海野十三展」開催時に発行された記念冊子から抜粋させていただいた。

平成27年度 徳島ペンクラブ事業報告

事業名	内 容	期 日 ・ 備 考
徳島ペンクラブ選集 ペンクラブ通信	年1回刊行しているもので、今年度はPART33号 特集 モラエスの魅力いま一度 ペンクラブ賞 平成28年3月に発表 会員への通知、ニュース等 171～173号を発行	12月末発刊、送付 ペンクラブ賞表彰式は 28年度3月20日の研修 会で 講師に徳島城博物館の 根津寿夫学芸員「城下 町徳島の歴史を学ぶ」
とくしま随筆大賞	第16回 審査員は、徳島大学教授 依岡隆児氏 徳島新聞 生活文化部 撫養次長 竹内会長 大賞 櫻川ふみ (鈴木綾子)「生涯青春」 準大賞 正木孝枝「京都食べ歩き隊」 佳作 粟谷 健「物を言う茶碗」 星野 凜「洋上を思う」 雫 俊一「我が家の鳥たち」 奨励賞 佐藤智美「読まれるということは」	表彰式 平成27年10月4日(日) 阿波観光ホテルにて 6月に第一次選考 7月に最終選考
文学旅行	春 愛媛県 (松山東高校、坊っちゃん列車、秋山兄弟の 生家、砥部町の坂村真民記念館) 秋 高知県 (県立文学館、寺田寅彦記念館、高知放送ホ ールにて山本一力+檀ふみ対談を見学)	3月27日(金) 10月12日(月)
理事・執行部会	理事会を毎月1回、原則第1土曜に開催 イベントに応じた臨時招集有り	県民文化祭のための臨 時招集 会場の都合により変更 もあり
主催事業 協賛・協力事業	第17回徳島県民文化祭分野別フェスティバル テーマ「モラエス文学の魅力」 11月21日(土) 創立50周年誌プロジェクト発足 編集長に杉田理事 野口雨情歌碑 建立協力 三好市 富士正晴第6回高校文芸誌賞 最優秀 岩手県立盛岡第四高等学校	

平成27年度 収支決算

(平成27年4月1日～平成28年3月31日)

A 収入総額 2,308,879円
 B 支出総額 1,872,190円
 C 差引額 436,689円 (次年度へ繰越)

A 収入の部

科 目	決 算 額	予 算 額	内 訳
会 費 収 入	730,000	745,000	平成27年度会費 5,000円×146人=730,000円
負 担 金 収 入	627,000	720,000	ペンクラブ選集 PART33掲載料 451,000円 2頁 7,000円×54人=378,000円 3頁 9,000円×2人=18,000円 4頁 11,000円×5人=55,000円 会合出席者負担金 総会 4,000円×44人=176,000円 新年会 0円
補 助 金 収 入	199,000	250,000	県民文化祭助成金 199,000円
寄 付 金 収 入	11,800	3,000	春秋の文学旅行寄付金 11,800円
雑 収 入	33,443	20,064	ペンクラブ選集売上代金 33,325円 利息 118円
未 収 金 収 納	15,000	15,000	前年度会費 15,000円
前年度繰越金	692,636	692,636	
計	2,308,879	2,445,700	

B 支出の部

科 目	決 算 額	予 算 額	内 訳
事 業 費	1,110,927	1,130,000	ペンクラブ選集印刷代 829,892円 ペンクラブ通信印刷費 88,560円 徳島随筆大賞関係 145,290円 研修会その他 47,185円
通 信 費	204,897	410,000	事務局 47,274円 選集33号発送費 65,232円 ペンクラブ通信発送費 38,523円 その他通信費 53,868円
会 議 費	223,190	260,000	理事会・役員会他 46,032円 総会 177,158円 新年会 0円
諸 会 費	9,000	10,000	徳島市文化協会会費等 9,000円
慶 弔 費	10,960	20,000	出版文化賞祝 10,960円
事 務 費	9,281	20,000	事務用品(インク・用紙他) 9,281円
特別事業費	284,765	350,000	県民文化祭参加事業「モラエス文学の魅力」 284,765円
雑 費	19,170	40,000	振込手数料等 19,170円
予 備 費	0	205,700	0円
計	1,872,190	2,445,700	

平成27年度の収支決算について監査の結果、適正に処理されていたことを認めます。

平成28年4月26日

会計監査 新開 英毅 (新開)

会計監査 二橋 満瑠 (二橋)

平成28年度 徳島ペンクラブ事業計画

事業名	内 容	期 日
ペンクラブ選集	年1回刊行しているもので、今年度はPART34号 特集 海野十三（予定） ペンクラブ賞1名・次点数名を選出する。	9月末締め切り 12月末 発行発送予定 ペンクラブ賞投票
ペンクラブ通信	会員への通知、ニュース等	年数回発行
とくしま随筆大賞	第17回 審査員は、徳島大学教授 依岡隆児氏 徳島新聞 生活文化部 部長 竹内会長 (大賞、準大賞は作品をペンクラブ選集に掲載)	6月末〆切 審査6月～8月予定 表彰式 日程未定
文学旅行（散歩）	春は第1回文学散歩（徳島市南佐古の山麓コース） 秋の文学旅行は「大阪・堺市」安曇統太理事が担当	4月29日(日)実施済み 11月予定
研修、講演	講演とペンクラブ賞授賞式、懇親会などを兼ねて開催	来春3月予定
理事・執行部会	毎月第1土曜に開催（会場の都合で変更あり） その他、必要に応じて理事会・執行部会を招集	基本的に定例毎月第一 土曜午前10時から文学 書道館にて
主催事業	平成28年度徳島県民文化祭分野別フェスティバル事業 テーマ「日本SFの父 海野十三」 10月16日予定	理事会で内容等を検 討、具体的に進める
特別事業	50周年記念誌発刊準備（平成29年9月発刊予定）	各役員・全会員参加協 力で仕上げていく
その他	理事会で協議し、必要と認めた事業の実施、	
事業協力	依頼事業（文学関係）の支援・後援・共催事業など 三好市 富士正晴全国同人雑誌賞	

選集の負担金について

会員負担金 2ページ（原稿用紙5枚2000字まで）7000円
追加1ページ（原稿用紙2.5枚1000字以内）につき2000円
（1ページだけの追加は編集の関係上ご遠慮ください）

配布数 会員 1部 会員執筆者 3部
追加分 1部千円にて販売 ※会員外の販売は原則定価（書店売りと同じ1500円）

※掲載料が高いという指摘を再々いただいておりますが、依頼原稿への謝礼や郵送費等もあり、なかなか財政は厳しいのが現状です。当面は現状で運営してまいりますので、ご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

平成28年度 収支予算

(平成28年4月1日～平成29年3月31日)

A 収入総額	2,114,800円
B 支出総額	2,114,800円
C 差引額	0円

A 収入の部

科 目	本年度予算額	前年度予算額	内 訳
会 費 収 入	740,000	745,000	平成28年度会費 5,000円×148人=740,000円
負 担 金 収 入	660,000	720,000	ペン選集 part34掲載料 500,000円 会合出席者負担金 総会 4,000×40人=160,000円
補 助 金 収 入	250,000	250,000	県民文化祭助成金 250,000円
寄 付 金 収 入	3,000	3,000	各種寄付金等 3,000円
雑 収 入	20,111	20,064	ペンクラブ選集等売上代金 20,000円 利息 111円
未 収 金 収 納	5,000	15,000	前年度会費 1名 5,000円
前年度繰越金	436,689	692,636	
計	2,114,800	2,445,700	

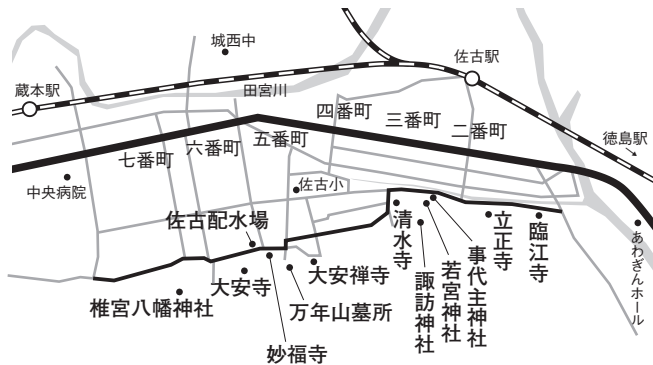
B 支出の部

科 目	本年度予算額	前年度予算額	内 訳
事 業 費	1,100,000	1,130,000	ペンクラブ選集印刷代 800,000円 ペンクラブ通信印刷代 100,000円 徳島随筆大賞賞金等 100,000円 講演会・研修会 100,000円
通 信 費	210,000	410,000	事務局 50,000円 総会案内・通信送料等 160,000円
会 議 費	260,000	260,000	理事会・役員会等 100,000円 総会 160,000円
諸 会 費	10,000	10,000	徳島市文化協会会費等
慶 弔 費	20,000	20,000	
事 務 費	10,000	20,000	事務用品代他
特別事業費	350,000	350,000	県民文化祭参加事業「海野十三」 300,000円 50周年記念事業準備 50,000円
雑 費	40,000	40,000	振込手数料等
予 備 費	144,800	205,700	
計	2,114,800	2,445,700	

※各科目間の流用を認める

27人 街の歴史とウオーク満喫

臨江寺—諏訪神社—清水寺—大安寺—椎宮神社



県外への文学旅行に代わっての第1回春の文学散歩は、風はやや強かったが好天に恵まれた祝日の4月29日、27人が参加して眉山の北側、南佐古の山麓コースで実施された。

丁山俊彦さんがガイド役

である万年山墓所は、参加者の年と体力を考えて断念した。

南佐古一番町から七番町にかけては、道幅こそ狭いが平坦で、車の往来も少なく絶好のウォーキングコース。諏訪神社や椎宮さんのツツジはやや時節を逸していたが、新緑がカバーして余りあった。

見学の要所所では、今回の文学散歩担当の丁山俊彦さんがガイド役を務め、一行を近くにありながら見逃しがちだったにしえの阿

午前10時、集合場所のあわぎんホール前を出発。南佐古一番町の臨江寺を皮切りに、眉山の麓沿いを諏訪神社—清水寺—佐古配水場—大安寺—六番町の椎宮八幡神社の順で見て回った。眉山の北麓沿いのこのコースは、由緒のある寺や神社、墓所が点在して見飽きることがない。当初予定していた蜂須賀家の墓所

雑感

先日ペンクラブで、南佐古の街を歩いた時のことである。諏訪神社の急な階段の入口に、巨大な石があるのに気が付いた。正面には「まよいご石」と深く彫られている。丁山さんの説明で、徳島にも江戸時代の「まよいご石」が残っていることを、初めて知った。

まよいご石

つたと思われる。では、佐古の諏訪神社は、迷子が出るほどにぎわっていたのか。

江戸時代、佐古は佐古川の水運により商業の盛んな土地でも栄えていたそうだった。実はこのことも、今回説明を聞いて初めて知った。諏訪神社は、蜂須賀家の庇護を受け、佐古の町衆の寄進も多かった。祭りの時の夜店は、周辺を埋め尽くしてしまっただ。ほど大規模であったそう

阿波踊りの囃しことば、「笹山通れば笹ばかり」の笹山は「佐古山」のことだという話も、佐古が栄え注目されていた地域であることの証であるように思われる。

今回、私たちの歴史散歩は、一人の迷子を出すこともなく無事に終了した。これは参加者のひとりが持つてきてくれた笛のおかげである。車が来た時や、分かれ道で迷いそうな時、いいタイミングで笛が高らかに鳴って注意してくれたのだ。

今回の企画から説明等、丁山さんには大変お世話になった。ありがとうございました。次回も楽しみであります。

(正木孝枝)



諏訪神社下を探索する一行



椎宮神社が誇るツツジの横で記念撮影



幕末の三筆・貴名菘翁(ぬきな・すうおう)ゆかりの寺・清水寺

波の歴史の世界にいざなっていたいただいた。
 ちよつと遅めの昼食を、
 椎宮神社近くの「竹庵」という店で、全員、ミニ井付きのうどん定食と一緒に頂いて、流れ解散となった。
 今回は、文学散歩というより阿波の歴史散歩といった趣だったが、参加者の評判も上々で、文学旅行に代わる春の恒例行事として定着しそうだ。
 (文学散歩の詳細は12月末発行の選集に掲載)



保存会会員による門付芸の実演①あいさつする辻本一英さん②(阿波観光ホテル)

い」と祝辞を述べた。祝賀会では、正月の門付芸・三番叟まわしなどの実演や、同会の活動を振り返るスライドショーもあった。

兼ねて4月30日、徳島市の阿波観光ホテルであり、飯泉知事ほか県内外の文化関係者ら230人が出席し、盛大に祝った。ペシククラブからも竹内会長をはじめ多数の会員がはせ参じ、辻本さんらの功績をたたえた。
 保存会では、1995年から長年にわたって一人遣いの人形芝居の伝承に取り組んでおり、飯泉知事は「徳島の伝統文化を世界に発信してくれている。日本文化をさらにけん引してほしい」と祝辞を述べた。祝賀会では、正月の門付芸・三番叟まわしなどの実演や、同会の活動を振り返るスライドショーもあった。



辻本一英さんが創設し、現在顧問を務めている阿波木偶箱まわし保存会(中内正子会長)の発足20周年を祝う会が、辻本さんの「水木十五堂賞」受賞祝賀を

辻本さん
創設

箱まわし保存会20周年祝う

会員トピックス

地蔵寺に2つ目の句碑完成

船越淑子さん

青海波俳句会主宰・船越淑子さんの自身2カ所目となる句碑（写真）が4月18日、四国八十八箇所第五番札所・地蔵寺の境内にお目見えした。桜御影石（縦1・4尺、横1・2尺）には、「大河の闊豊かなり二番藍 淑子」と大書されている。最初の句碑は10年ほど前、小松島市内の藤樹寺に建立された。この日の句碑開きには「青海波」の誌友ら多数が駆けつけ、完成を祝った。



会員短信



★杉田卓式さん 6月6日から6日間、東京銀座のど真ん中、デパート松屋前の井上画廊（井上商会ビル3階）で個展「杉田卓式展」を開いた。出展した絵は、徳島新聞社退職後、アートスクール大阪で学ぶなどして描いた30〜50号の女性像や風景画などの油彩画24点。これに先立ち、3月1日から1カ月間、徳島駅前の森珈琲店でも同様の個展（写真）を開いた。

★眞野孝彦さん 4月3日から29日まで、徳島市銀座のギャラリー喫茶グレイスで「眞野孝彦 油彩画展」(写真)を開催した。展示作品は、近作の風景、生物、人物など、SM(2号)から10号までの

小品25点ほど。いずれの絵も、落ち着いた雰囲気の内によくマッチして、来客らの目を楽しませていた。



★宮田憲治さん 県西部の同好の士による「ペンクラブ西阿波の会」(13人)を立ち上げ、6月1日、会誌「汽水」を創刊した。内容は、短歌のほか俳句、川柳、随筆、童話など多彩。地元児童の俳句や西阿波ゆかりの詩人の色紙・短冊展の模様も。編集は、これもペンクラブ会員の服部俊次さん。見事な誌面構成で、作品の魅力を引き立てている。事務局担当の宮田さんは「将来はペンクラブの支部のような形にできれば」と話している。

★木村英昭さん 徳島現代詩協会の会長にこのほど就任した。長年務められた扶川茂さんに代わっての登壇。「私はワンポイントリリーフ。今年協会発足30周年に当たる。記念誌の発行に全力投入したい」と話している。

新入会員

(敬称略、カッコ内は推薦人)

東根 泰章 〒773-0001 小松島市日開野町高須5(竹内会長、鈴木副会長)

島田 忠明さん (徳島市大和町2丁目1-36)

訃報

5月1日病気のため入院先の徳島市民病院で死去。

享年71歳。エッセーが得意で、徳島県中小企業団体中央会発行の「中央会情報」に長年にわたって『ちょっとお時間いいですか』のタイトルで連載、この3月発行の中のエッセーが最後となった。』

※「編集後記」はお休みしました。

(倉)